

日本の英知が集結する令和の水滸伝。

編集部

現代版『梁山泊』は智の集う広場

中国において、『西遊記』『三国志演義』『金瓶梅』とともに「四大奇書」のひとつに数えられる『水滸伝』は、その内容が反権力的な傾向を持つことから、しばしば禁書とされながら、広く大衆に愛読され、現在も中国で農民革命の文学として高く評価されているという。

山東省済寧市梁山県にある梁山泊に108名の「愛国の士」が勢ぞろいする第1回から、波乱万丈のストーリーが展開していく。

北宋末期徽宗皇帝（在位1100年～1125年）の治世、貧富の差が激しいことを憂い、農民・商人・兵士など、身分を問わず人々の幸福を目指した王安石という宰相の「新法」にまつわる乱世を背景に、そもそもは徽宗期の12世紀初頭に宋江を首領とする36人が梁山泊の近辺で反乱を起こしたという実話を背景に生まれた話だが、12世紀中

盤の南宋の頃には史実をもとに物語は膨張し、講談として人気を博していたらしい。13世紀頃に書かれた説話集『大宋宣和遺事』には、宋江以下36人を主人公とする物語が掲載されている。

1000年ほど昔の「世直し」をテーマとした物語だが、英雄豪傑が集うストーリーは必ずと言えらるほど梁山泊になぞらえられるのが常である。

本誌において、哲学的な視点から時代を読み、未来を語る著述を展開されている、株式会社人間と科学の研究所の飛岡健氏が発起人となり、明治大学名誉教授で死生学・基層文化研究所代表の金山秋男氏とともに立ち上げたのが『智の梁山泊』である。

新型コロナウイルス感染症の猛威の中、オンライン形式でスタートした週1回の講演会は、森羅万象を対象に「生きる」ことを謳歌すべくさまざまな話題に取り組み「いのちの広場」と隔週で開催され、現代日本の智の巨人たちが集う場となっている。

各界の巨匠たちのプロフィール

飛岡健氏の呼びかけに応え、オンライン上での『智の梁山泊』に集結したのは現在までのところ次の8名である。（敬称略）

① 飛岡健（人間と科学の研究所所長・創業者）

1973年東京大学工学系大学院博士課程を修了、東大のロケット衛星研究に従事。その後、哲学、社会学、経営学等を学び、学際的研究を進め、1975年、商品・市場・技術等の未来予測のための「現代人間科学研究所」を設立。政府や地方自治体及び民間企業からの委託研究に従事、成果を上げている。講演回数は3000回以上、著作は130冊以上に及ぶ。現在、未来予測研究会WSFの勉強会を東京、神戸で主宰している。

② 金山秋男（明治大学名誉教授）

1948年栃木県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。

患った神経症を機に曹洞宗の總持寺にて禅修行に入り、宗祖道元の『正法眼藏』の「生死の巻」から死生学研究を開始。それが日本人特有の靈魂観や他界観究明につながり、伊勢、熊野、出雲を中心とした神話学と、沖繩の離島や東北、北陸などを舞台にした民俗学への道を開いた。

主たる関心は、兎角断片化されがちな人間存在を、分野の壁を越えて宇宙の時空に解き放ち、総体的にとらえること。そうした活動は在職中から、大学の枠を超えて様々な講師を招いて自由に議論するという形で遂行された。また日本各地の神社仏閣でも様々な講座を展開、その生活者の目線から発せられる易しい語り口には定評があり、特に詩歌に詠まれた日本人の生老病死の受け止め方についての語りは人気を博している。

③ 若麻績敏隆（長野善光寺白蓮坊住職）

1958年長野県生まれ。東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。同大学院美術研究科修士課程修了。大正大学大学院仏教学コース修士課程修了。現在、善光寺白蓮坊住職。僧職のかたわら、自らの原風景を求めて絵画

『智の梁山泊』

制作を続ける。独自の視点で宗教とは何かを問い続け、普遍的な死生観を探求している。

④堀信行（地理学者／理学博士）東京 都立大学名誉教授

1943年生、名古屋育ち。1967年広島大学教育学部卒業後、同大学院文学研究科地理学専攻。1968年東京都立大学理学部地理学科助手。1978年広島大学総合科学部講師を経て助教。1992年東京都立大学理学部助教を経て教授。その後、大学改編で首都大学東京都市環境科学研究所教授。2007年定年退職後、奈良大学文学部地理学教授、図書館長他を務め、2014年退職。都立大学時代を含め文化庁世界文化遺産特別委員会他の委員を務めた。目黒区の生涯学習「めぐろシテイカレッジ振興会」会長を務め現在に至る。研究分野は、サンゴ礁地形研究を軸に、アフリカの環境変遷研究や人間と自然の総合的関係を考える風土論・景観論研究を行っている。

⑤出口三平（出口王仁三郎研究者）

1946年佐賀県小城市生まれ。京大文学部哲学科卒。大本教団の教学研鑽所勤務。1980年教団改革運動

に関わり、1986年、出口王仁三郎提唱の「愛善苑」の再興に取り組む。1997年以降、教団組織を離れ、自由な模索活動に。現住所、京都府綾部市上野町上野165。

⑥丹生晃市（高野山住職）

丹生都比売神社住職。東京生まれ。國學院大學文学部神道学科卒業。本社本庁に勤務。1985年から丹生都比売神社兼務を経て、2006年に宮司に就任。累代の物神主家から九州に分家した血筋にあたる。『丹生都比売神社史』（2009）の刊行、世界遺産の啓蒙活動の他、和歌山県の「いのりとみのり」をテーマに観光推進活動にも取り組むなど、活動の幅は広範囲に渡っている。

⑦温中申（NAKAYAMA HIR OSHI）北京生まれ。医学博士（M. D. MA代替医学専門）

スポーツ医学とスポーツ心理学専門家として中国オリンピック選手団の健康管理分野で活躍した。1980年代末に筑波大学研究員として運動生理学と予防医学を研究。東洋漢方医学、予防医学の知見と原理を現代農学に融合させて、本来の生態系へと戻す環境保全型の「土壌改良」、食物と人体の細胞

に共通する「細胞分子栄養学」による「農食健一体型」の栽培管理技術を開発。環境保全と健康にこだわる食育活動として、世界各国にて「医食農禪」の普及活動を行っている。

⑧太田浩史（富山県南砺市 大福寺住職）

1955年富山県生まれ。大谷大学卒業。真宗大谷派大福寺住職、日本民藝協会常任理事、とнами民藝協会会長。著作：『柳宗悦と南砺の土徳』、『相馬移民と二宮尊徳』、『真宗移民とは何か』、『妙好人棟方志功』、『御影道中御上洛記』

令和の世に『智の梁山泊』は
何を指すのか

環境問題、地球温暖化、新型コロナウイルス感染症のパンデミック、ロシアのウクライナ侵攻など、新世紀を迎えて四半世紀を経ようとするいま、日本のみならず世界を取り巻く情勢は混沌を極め、人類はどこへ向かうのか、行き先の見えない状況が発生している。ところが人類そのものは目前の小事に拘泥し、大局を見ようとせず、滅び



令和の水滸伝はどう展開するのか

ゆく自らの姿を省みようとしない。このような社会の閉塞感に早くから警鐘を鳴らし、いかにして打破し未来を拓かんと、英知の結集を目指した金山秋男氏の活動に意を同じくした飛岡健氏は、現代の「宋江」となり、盧俊義たる金山氏を誘い、この令和の世に生まれたのが、『智の梁山泊』である。この憂国の士たちが集うのはオンライン上の「水の畔」だが、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが明けつつある今、徐々にその姿を世に問うていくことになることは間違いない。

この『智の梁山泊』において展開された諸兄々の講座を探り上げ、誌面においてご紹介することで、来たるべき未来への提言を行ってみたい。